図書だより

〈第26号〉
平成４年２月25日
呉工業高等専門学校
図書委員会

ケベック（カナダ）アッパータウンの中心ダルム広場－この周辺に英仏戦争の歴史をしのばせる記念碑が建っている。
（藤原教官撮影）

目　次

〔表紙〕……1
〔読書感想文〕
文学　「未来いそっぷ」（星　新一）……M１　樫野　泰司……2
「母のない子と子のない母と」（壷井　栄）　E１　鎗野　泰成……2
「雪国」（川端　康成）……C１　楠田　貴志……3
「新源氏物語」（田辺　聖子訳）……A１　首尾木真樹……3
倫社　「真実を求める人・ソクラテス」……M２　桑原　隆……4
「自分の考えを持っている人・ソクラテス」　E２　蔦本友香子……5
「馬鹿正直なソクラテス」……C２　矢津　香……5
「不器用な知者・ソクラテス」……A２　山沖恵美子……6
歴史　「パレスチナの蜂起」（高木規矩郎）を読んで　M３　大石　大輔……6
「日本文化史」（辻善之助）を読んで……M３　土井　博利……7
「楠木正成」（邦光史郎）を読んで……E３　山重　真文……8
「景徳鎮からの贈り物」（陳舜臣）を読んで　E３　伊木麻由未……8
〔随想・読書雑感〕
読書に見る『中国と私』……M５　本庄谷　拓……9
「西郷隆盛の遺書」（伴野朗著　新潮社）……E５　福田　善道……10
〔新任教職員随想〕（その２）
学生諸君！英語にもっと強くなろう!!……機械工学科教官　池上　廉平……11
遺伝子と人生……機械工学科教官　深澤　謙次……12
ハイテク社会と技術者……電気工学科教官　小林　康秀……13
私の趣味……学生課学生係長　河井　孝之……14
由無し事……会計課事務官　林　昌代……15
多くの出会い……学生課技官　田村　忠士……16
会社での想い出……土木工学科技官　小松　孝二……16
〔私の推薦する本〕
五味川純平著「神話の崩壊 関東軍の野望と破綻」
（文芸春秋）……一般科目教官　有廣　圭司……17
黒澤明著「全集黒澤明　１～６」（岩波書店）　機械工学科教官　京免　進……17
B. Arazi著「わかりやすい誤り訂正符号」
（共立出版）……電気工学科教官　横瀬　義雄……18
〔夜間開館担当者より〕
図書館（夜間）に勤め始めて思うこと…　図書係事務補佐員　中島　教江……18
〔新着図書30選〕……19
〔留学生手記〕
インドネシア人の日本についてのイメージ……　C３　ペトルス　ラハユ……22
〔海外だより〕
ケベック（1991年５月20日～30日）……土木工学科教官　藤原　章正……23
〔お知らせ〕時間外閲覧利用状況、「読売新聞」備付開始……24
〔編集後記〕……図書委員　石井　義明……24

読書感想文

文学

「未来いそっぷ」

（星　新一　著）

M１　樫野　泰司

未来いそっぷも含めてだが、この人「星新一」の作品は、みな雑然としていて、全くといっていいほど統一性がない。それに加えて浮わついていて、あきっぽく、気まぐれときている。おまけに独断的である。だが、この人の作品にはどこか奥深さがあり、そこまでつきとめることができると思わず吹き出してしまうほど面白いこともある。ただ、この奥までつきとめるというのが意外と難かしいことでもある。

この人の作品はけっこう読んでいるのだが、読めば読むほど不思議に思うことがある。それは、どこからあんなに奇抜な発想が次から次へと生まれて来るのか、ということである。この答えについては『ＳＦの短編の書き方』というエッセイに書かれているものを引用する。これによると、

1．まず、本をできるだけたくさん読んで知識の断片を増やす。
2．その断片の組合せは、雑然と頭に浮かんできた組合せ（例えば、幽霊と催眠術、友情と動物園）をメモする。
3．そのメモをにらみながら、最もモノになりそうなものを検討する。

といった具合にするそうだ。こういう過程を踏むことにより、既成の常識や感覚にない意外なものをつくり出すのだという。このことなどからわかるのが、星新一が文学で一番重要にしているのは、「意外性」だ、ということである。

話は変わるが、この人の作品には特定のきちんとした個人名が出てこない。しかも、「エヌ氏」や「エフ氏」のように大変奇妙な名がつけられている。それに加え、同じ名が違う作品にも使われている。この人の作品はまったく奇妙で意外性に富んでいる。

だが、この人の作品にはどこかに強く訴えかけるものがある。それは、時には心打たれるものもある。星の作品は環境問題について訴えているものがけっこう多い。それも含めて星の訴えは人間の欲や人の汚れたところについてのものがほとんどである。僕が最初に書いた「雑然としていて統一性がない。」というのは人間の実態そのもので、星はそれを何か別のものに置き換えているのだと思う。

『母のない子と子のない母と』

（壷井　栄　著）

Ｅ１　鎗野　泰成

罪のない人を無差別に殺す、これが戦争であり、それは本当に醜いものです。

戦闘や爆撃で人の命を奪い、その家族や親しい人の幸せまでも燃やしてしまいます。

戦争で子供と夫を失ったおとらおばさんと、戦争中に病気の母親と死別した太田一郎は、子のない母と母親のない子にされてしまいました。

一郎くんのお父さんは戦争が終わってから帰ってくることができました。けれど一郎の友人の達雄君のお父さんは戦死してしまいました。一郎君のお父さんが帰ってきたのを見た時、達雄君はとても悲しい思いをしただろうと思います。この話を読んだだけで悲しくなるのだから、達雄君の悲しみはとても言い表せるようなものではなかっただろうと思います。

僕の祖父も戦争で多くの傷を負っていました。戦争は本当に憎たらしいものです。

しかし、戦争が本当に悪いことだと認めていない人もいると思います。

なぜなら反乱を鎮める為、自分勝手な政権（独裁者）を弾圧する為に武力を正当化する人がいるからです。

悲しいことに最近でも湾岸戦争をはじめバルト三国への武力行使などが見られ、大きなつめ跡を残しています。

どのような理由があっても、人を殺すということは正当化されないものだと思います。

戦争は国家公認の殺人です。近ごろは戦争をテレビゲームのように考える子供もいるとのことですが、とんでもないことだと思います。

せっかくの科学の進歩も間違ったことに使われています。人の生活を豊かで便利にしてくれるけど、人の意志しだいで多くの人の命と家庭と幸せを消滅させてしまいます。

決してそんなことが許されてはいけないと思います。

怒るとすぐに力にうったえてしまいがちなのが人間ですが、互いに話し合うことによりかい決することのできるようにならなければいけないと思いました。

人類の歴史の中で戦争はたえず行われてきました。戦争は科学を進歩させるとか、人口の増加を防ぐとか言っている人に会ったことがあります。このような状態ではまだまだ戦争はなくならないと思います。一人一人が、戦争は人の幸せを奪うもので行ってはいけないものと認識しなければならないと思いました。

僕も戦争の醜さを訴える本をもっと読んで、心底から戦争を憎めるようになりたいと思いました。

「雪　国」

（川端　康成　著）

1C　楠田　貴志

「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった」という有名な始まりかたをする本を僕は初めて読んだ。中学校の国語のテスト問題でよくつかわれる文句です。

はっきりいって約縦10センチ、横15センチの小さい本を150ページも読んだのは、生まれてこのかた初めてでした。今までこんな宿題は友達にみせてもらうのが常だったので、このページ数を読むのに4日かかったほどでした。目は痛くなるし、疲れるし、たいへんで、本の中で「彼女は…」といっても誰だったか分からないことも何回となくあった。

読んでみての感想は、こんな読書をしても、北国で雪がしんしんと降っている姿がうかびあがってくるほど想像力ゆたかでした。始まりの、汽車の外はやみで汽車の中はあかりがついているので外をみると窓ガラスに反対側の席が映っているところなんかは、よく家に帰るのにあることなのでよくわかり、空にある夕日と島村と同じ汽車に乗って男をかんびょうしている葉子が重なったり、夕日と同じように火が重なってなんともいえぬ美しさだったというところは、すごく印象的でした。登場人物は島村と島村が東京から会いに行った芸者駒子、お師匠さんの娘の葉子、駒子のいいなずけの行男です。季節は秋の終わりから冬のはじめです。島村という男はいつもおんだんな性格をしていて駒子は夜、島村のとまっている宿のえんかいが終わるといつも足をふらふらさせながらよってきては、いろんな思い出話を一方的に話しては家に帰っていくといった調子でした。性格は島村と正反対におんだんなところもあるけど急におこったり急に泣いたり、さけんだりし気性の激しい性格でした。葉子という人は、なんだかよくわからず時々えんかいに出たり、働いたりしてとてもしたたかな性格でした。島村と駒子の関係は、島村の思いを文章の中で表現しているのでよくわかったけど駒子は、いまいち最後までわかりませんでした。でも島村はすこし葉子にもひかれているような感じもしました。全然内容がつかめてないけど今おもえば本の文章全体の3割ぐらいは登場人物とそのまわりのとのびょうしゃが、おもいもよらないことや、ちょっとしたことをたくみに表現しているのが目立ちました。例えば、天の河が自分をつつむように流れているとか、駒子の顔の表現を円い顔の中央がはながすっと高いために中高いといったり、まゆげのことは、やわらくて下にたれているといい、目は、つりあがってなくさがってもないまっすぐな目とかたくさんのおもしろい表現がありなるほどというところがたくさんあり驚かされました。最後に強く印象に残っているのは雪のしんしんと降っている宿場町です。

このような本を買って読むのは初めてだったので、ほとんど内容がつかめなかったのでたくさん読んで慣れていこうと思います。

「新源氏物語」

（田辺聖子　訳）

A1　首尾木真樹

源氏物語をひとことで説明すると、源氏とたくさんの女の人たちの恋のかけひきの話ということになると思います。義母・藤壷との苦しい不倫の恋や、あるいは玉鬘みたいに流浪しているうちに思いがけず見出さ

れて出世するシンデレラ物語の要素もあるし、それから紫の上みたいに、ちっちゃな子を見つけてそれを自分の思うように教育して理想の妻とする話とか、どこを取っても広く読まれる物語の要素が入っています。また何より、源氏が魅力的な人物です。帝の御子でありながら母君の身分が低かったため、姓を賜わり臣下に降ったという生い立ちからして、ドラマがあります。1,000年もの間、読みつがれるほどの小説の面白さの原形を、実にたくさん備えた話です。それだからこそ、今なお読みつがれているのだろうと思います。

源氏物語を読み終った時、私は優雅な平安絵巻の世界にどっぷりとつかっていました。歌をよんで送り合う、夕暮れに、ふと思いついて管弦の遊びをもよおす。今じゃ考えられないような生活を送っていたことが不思議でなりません。同じ日本でも、時代がちがうだけでこんなに生活様式がちがってしまっているんですね。もし、平安時代に名のある貴族の家に生まれていたなら、私も優雅にお姫さんしていたのでしょうか。十二単衣を着たり、歌をよんだり、求愛の歌に心をときめかせたり、想像して…やっぱり想像の中だけの方がいいかもしれないと思いました。私には、とてもじゃないけど、立派な歌なんかよめない。送られてきた歌の意味なんてわからないかもしれない。身長の倍ほどまである髪なんてうっとおしいだけ。運動もせずに一日中部屋にいるのはたいくつ。きゅうくつな着物着て、おっとりと扇で顔をかくして笑ってなんかいられない。と夢をぶちこわすようなことばかり、思いうかんできてしまったわけです。これを考えると、平安時代のお姫さんって、えらいと思う。ぜったいにしんどい。短命だったのもわかる気がします。けれど、やっぱり平安時代のお姫さんというものに、あこがれます。

こういう平安時代にあこがれる一方、私はまた、あきれもしました。源氏はよくもあれだけたくさんの女の人に手をだしたなあ、と。正妻、葵の上をはじめ、六条御息所、藤壷の宮、紫の上、夕顔、朧月夜の君、末摘花、明石の上など数えきれないほどの女の人がでてきます。これだけの数に手を出したなら、あきれるのをとおりこして、感動にちかいものがあります。

また、この源氏物語を読み終り、著者である田辺聖子さんの訳は、うまかったと思います。平安時代の雰囲気をそこなわないよう、それでいて、現代人である私たちにわかりやすいよう訳されています。読みやすく、わかりやすく、そしておもしろかったです。前に円地文子さんの源氏物語を読もうとチャレンジしたことがあるんですけど、むずかしかった。口語と文語の中間のような文でした。それでとうとう途中でざせつしてしまった、という思い出があります。ですから、今回、源氏物語を読みおわったにあたり、長年思っていた目標をついに達成したという思いがありました。

倫社

真実を求める人・ソクラテス

M2　桑原　　隆

僕はこれらの本を読んでのソクラテスのイメージは、とても注意深い人だと思いました。というのは、真実を人々に伝えるためにまわりくどいというかわかりやすく話したり、例をあげたりして、へんに誤解されないように言葉一つ一つにとても注意を払っているようでした。まるで何日も練り返された原稿を読んでいるように感じました。そしてとてつもない精神力を持った人のように感じました。

多勢の前で本に書いてあったところから、どうどうとしている姿がうかびあがるくらいにです。そして、その中でひにくを人々にいえるというのは、なんだかすごい人だと感じました。それから有名なソクラテスと問答をした人達はそれまで人々に偉いと思われたり、自分でもそのように思っていたけど、ソクラテスとの問答の結果、無知をさらけだされ無知がただの無知でなくとても無知と感じられました。

逆にソクラテスは偉い人だと思われ尊敬されてもいいのに、ソクラテスの問答がおもしろいと思ってソクラテスについた若者が成人してから政治の面で不祥事をおこしたためにソクラテスは青年に悪い影響をあたえたとして人々にひなんされたのはとても不運だったと思います。でも不運とも思わずに人々に真実を一生懸命伝えようとし、半分伝わったのに、ソクラテスらしいひにくを言ったために死刑になりましたが死を恐れることが無知だといっただけあって死を恐れませんでした。「ただ生きるのではなく、よく生きる」というのをまっとうした人であったと感じました。

〈参考：新潮文庫『ソクラテスの弁明』(田中美知太郎　訳)
「世界大百科事典　16」（藤澤令夫）
「世界歴史事典　16」（藤縄謙三）〉

自分の考えを持っている人・ソクラテス

E２　蔦本　友香子

私はこの課題のため、古本屋で“岩波文庫33－601－Ⅰ『ソクラテスの弁明　クリトン』”を定価の半額の50円で買いました。初めは，“『ソクラテスの弁明』は授業中に読んだし，めんどくさいから『クリトン』だけにしよう”と思っていたのですが“せっかくお金を出して買ったんだし，『クリトン』だけじゃ感想文を書くにはちょっと短いみたい。しょーがないなあ”と結局『ソクラテスの弁明』も読むことになってしまいました。

この２冊の本に共通するソクラテスは副題にもあるとおり“自分の考えを持っている人”です。このことを特に感じたのは『ソクラテスの弁明』の中で，自分に対してなされた訴えに裁判官でもあるアテナイ人達を前に弁明している途中に“…思うに，人はいかなる位置にあっても､それが自ら最良と信じたものであれ、もしくはそれが指揮者によって指定されたものであれ、そこを、危険を冒しても、固守すべきであり、恥辱に較べては、死やその他の事の如きは毫も念頭に置いてはならないのである。”と言った所と，『クリトン』の中で“…なぜわれわれはそんなに多衆の意見を気にしなければならないのだろう。…多衆…には人を賢くする力も愚かにする力もない。彼らのすることは皆偶然の結果なのだ…。”と親友クリトンに対し、語った所です。ソクラテスの話す事柄には共感できる部分と、“ちょっと違うんじゃ…”という部分があるのですが、それはともかくとして、自分はこれが正しいと信じている、いつでも、何が起ころうとこの考えは変わらないといった態度－死に面してでさえも－は並大抵で示せるものではないし、本当に自分の考えを持っているからこそ、他の人々にも左右されたりしないのだと思いました。又、こういう人だから“決意した事ができないのは、真に「決意する」ということを知らないからだ”という、私達からすればあまりにも厳しい考えを持っていたということも何だか、納得できるような気がしました。

〈参考：『ソクラテスの弁明　クリトン』（岩波文庫、久保勉訳）〉

○「図書室では静粛に」

○「読んだ本はもとの位置へ」

○「貸出期間を守ろう」

○「図書室では飲食はやめよう」

馬鹿正直なソクラテス

C２　矢津　　香

２年になって倫社という授業を学びはじめました。その中でソクラテスという１人の人物について学びました。ソクラテスについて知りはじめたころは、「理くつのとおった人」というイメージをうけました。何故ならば、あることについていっけんまちがったように思われる意見でも、よくよく考えてみれば、たしかにソクラテスのいうことはあっているし、理くつがとおっているからです。

そして今回、ソクラテスについての本を読んでみると、少しイメージがかわってきました。いろいろな人と身近なことについて問答し、相手に無知を気づかせるほどなのだから、「理くつのとおった人」というイメージはかわらないけど、そのことによって、無知を気づかされた人々が、いかり、うったえをおこして、死刑までにしました。そこまで人々がおこるくらいにソクラテスは相手の無知を指てきし、相手の自しん過剰なところや、うぬぼれやひとりよがりなところを見事にあばいていったのでした。ソクラテスのそういう行動に私は「どうしてあとから自分が反感をかうようなことをするのだろう」「なぜそこまでしなければいけないのだろう」という疑問をもちました。相手に無

知を気づかせるのにも、もう少し、ちがったやりかたがあったのではないか、相手をおこらせてまで気づかせる必要があったのか」とも思いました。

死刑が決まったときも、逃げないで、自分の信念をとおして、けっきょくは、毒をのんで死にました。ソクラテスは悪いことを何１つしていないのに死ぬのはおかしいと思いました。死刑が決まったとき、ソクラテスはここで逃げたら自分の考えに反することだといいましたが、そのまえに、自分は、悪いことをしていないのに死んでしまったら、その悪を認めてしまうことになると、気づかなかったのかと私は思いました。死刑に従うということは、自分の罪を認めてしまうことになると私は思ったのですが、ソクラテスはそう思わなかったのかと、不思議に思います。

最後に私はソクラテスは、「自分に正直な人」なんだなあと思いました。

〈参考:「プラトン全集15」（副島民雄訳），岩波書店〉

不器用な知者・ソクラテス

Ａ２　山沖　恵美子

プラトンの対話篇を読んで、まず思ったことは、ソクラテスは正直で自分自身に忠実で、その上頭が良すぎて奇人（別の意味では偉人）なのだろうということです。これらはある意味では才能であって、ソクラテスはその才能を十二分に使って生きていたような気がします。しかし、才能を発揮はしたかもしれないけれど、私にすれば不器用な使い方に思いました。馬鹿がつく程自分に忠実で正直だったから、人の言動などに納得がいかないと理論を問う。当然な行動だけれど、問われた方ははっきりした根拠のないものだと的確な答えが出せない。しかもソクラテスは頭もいいのでごまかしはきかない。これらは確かに権力者にとっては邪魔だったと思います。私だって、納得のいかない理論に屈するのは嫌ですが、私がソクラテスを不器用だと思ったのは、彼が頭が良いゆえに出てくる嫌味、皮肉、それに言葉遣いのためです。私自身、「ソクラテスの弁明」や「クリトン」でのソクラテスの言葉の選び方は好きではありません。時代背景や政治的なことのせいかもしれないし、そういう言い方だからソクラテスなのかもしれません。でも、私は、そこまで頭がいいのなら、なぜ人の心理まで考えなかったのだろうかと思います。ここまでいうと相手はどんなに傷つき、自分を憎むようになるか、それを考えて言葉を選んでいればもっと楽にいれたかもしれないのにと思います。

しかし、元来人間は、ある部分ではソクラテスのように生きるべきでもあると思います。知行合一、常に自分に忠実に善く生きようとする。いつの世の中でもこれを行うことは並たいていのことではありません。それを成しとげたソクラテスの生き方は理想にあたいすると思います。でも消極的になってしまうと、邪念がはびこる俗世間でソクラテスのように生きることは自殺行為で、凡人にはできたものではありません。だからソクラテスは奇（偉）人だと思うのです。私も自分なりの理論をもっていますが、私にとって、ソクラテスとソクラテスの生き方は、人間としての理想で目指すのなら、もっと器用に善く生きようとする方がいいのではないかと思いました。

〈参考：『ソクラテスの弁明・クリトン』（岩波文庫、久保　勉訳）〉

歴史

「パレスチナの蜂起」を読んで

（高木規矩郎　著）

Ｍ３　大石　大輔

1987年12月、イスラエル占領下のパレスチナ人は投石で立ち上がり、インティファーダ（蜂起）と呼ばれる抵抗運動が始まった。それは中東和平に新たな展望を与えた。だがその矢面に立っているのは子供たちであり、女性だった。

この本を見てショックだったのは、自分と同じ年頃の子がイスラエル兵に向かって投石し、母親たちは兵隊に抗議するが、イスラエル兵は彼らを連行し、必要あらば銃撃する写真を何枚も見たことだった。一体インティファーダとはどんなもの何だろう。

インティファーダの背景には、イスラエルの占領地住民の民族解放へのやむにやまれぬ渇望があると言われている。ＰＬＯすらが自分たちの民族的権益を保証してくれないのだから絶望感から切羽詰まった意識が

生まれ、投石という無理なことをするのかも知れない。

このようなインティファーダによってイスラエルはどのような反応をしたのだろう。国際的な面では中東での強硬姿勢の見直しを迫られている。軍部ではなりふりかまぬ弾圧政策で、その任務の内容に対する疑問からモラルの低下や、体制批判までおきている。

インティファーダでは投石といった暴力的な行動の他にも文化的活動による抵抗が起きている。その１つに占領地向け放送があり、次のような詩が放送されていた。／わがパレスチナの地を占領するもの／汝たちに災いあれ／われら汝たちの弾圧を物ともせず／緑の枝と石だけで／汝たちの日々を暗闇に変えてやる／汝たちに災いあれ／。またパレスチナでは反イスラエルをメッセージとした劇を公演しているとも言う。子供を対象としてである。一体これはどうだろう。何も物事が分からない子供にこのような事をふきこめば、ただやみくもに反イスラエルをとなえる様な大人を育ててしまうことにならないだろうか。先の湾岸戦争でもパレスチナ人の子供が大人以上に狂信的にサダム・フセインを支持する言葉を叫んでいた。もちろん、パレスチナでイスラエルが行っていることは絶対に正義と呼べるものではない。しかし、子供に無理矢理に思想を植え込むことは正しいことではないと思う。そうでないと争いは大きくなっていくばかりになることは歴史が証明しているからだ。

結果的にインティファーダは何をもたらしたのだろう。インティファーダは、周辺アラブ諸国や、ＰＬＯなど既成の政治体制を突き動かし、占領する側のイスラエルにも占領構造を根底から見直すきっかけを与えた。欧米にも中東和平の緊急性を確認させた。そうするとインティファーダも意味あることといえるか、代償として住民が射殺されている。しかも大半が幼児や子供である。極めて悲しいことだ。

（高木規矩郎著　読売新聞社　1989）

「日本文化史」を読んで

（辻　善之助　著）

Ｍ３　土井　博利

今の世の中の歴史は、原始時代（先史時代～550）があったからだということは、言うまでもないであろう。その歴史を僕は深く探ってみたいと思い、この本を読んでみました。原始時代は採集経済の時代で、狩猟と漁撈とにより生活していた。その当時の石器や骨角器の遺物を見ると弓矢や槍で鳥獣を捕え、鈎、銛や錘をつけた網で魚介を捕えたことがわかり、食料品はその種類多く、かつ豊富であった。弥生時代に農耕が行われても狩猟と漁撈は依然として続けられたようでした。採集経済の域を脱して農耕生活にはいった弥生時代には、炭化した米粒が土器に伴出し、土器に遺った籾痕が注意せられる。耕作には水田も作られ、その遺跡が今も静岡県登呂に見られます。農具は鋤・鍬で、北九州では青銅製品が発見されているが、近畿・東海では木製品が用いられたと、今でも伝えられています。次に住居について語ってみると、原始人は、ほら穴みたいな所で生活していたけど、縄文時代には、沖積層の台地で水利の便利なところに住居を求め、そこに方形もしくは円形で地表から約１ｍ掘り下げたところを土間とし、そこを床とし四隅に柱を立て、柱の上の井桁に丸太を置き、それに小柱をもたせかけて萱などで地面まで葺きおろしたようでした。その周囲には溝を掘り水はけをよくし、内部には中央から少し片寄った所に炉を設けてあった。それが弥生時代には住居は小判形となって、地表と同じ高さで、周囲に濠をめぐらしたものが現れた。銅鐸の鋳出文によれば、床が地面からかなり高い家屋があったようである。古墳時代には竪穴住居も少しは作られたが、高床式住居の方がさかんに営まれ、古墳の石室や石棺などにもその形式が使われた。家屋には出入口を開き窓をつけ、倉庫、納屋には戸口が１つあけられている。鏡の家屋文には高床家屋に桟敷の露台状のものが設けられていた。今日の大社造・住吉造・明神造などの神社建築は多分に上代の家屋建築の様式を伝えられているそうです。

今日の生活、文化の発展などは、昔、原始時代から始まった日本の文化によって、なされてきていることだと思います。我々はその時代に生きてきた人々に感謝しなければならないと思います。

『楠木正成』を読んで

（邦光史郎　著）

3Ｅ　山重　真文

ＮＨＫの『太平記』にでてくる楠木正成ははたして本当にあのようであったのかと思いこの本を手にしたところ僕はたちまち正成のファンになってしまった。

河内国住人にすぎなかった正成は武功ではかなりのものがあった。それに目をつけた後醍醐天皇は正成を味方につけ鎌倉幕府滅亡をはかったが幕府軍に敗れて隠岐に流されてしまった。正成は籠城していたが自分が死んだものと見せかけて、おちのびた。その作戦がまたすごかった。戦死者を穴に入れて油をそそいで自分が逃げたあとに城に火をかけて自害したように見せかけたのだ。こうまでして生きのびようとしたのは正成の使命感のたまものであると思う。正成は家臣たちに「われらは天下に先立って義兵を挙げたのである故死はもとより覚悟しているが、天下のために当分死ぬわけにはまいらぬ。」といっている。

正成は一度は逃亡したがまた突如として500余騎の兵をひきいて幕府にたたかいをいどんだ。正成のたくみな戦術で健闘しているあいだに後醍醐は隠岐を脱出して諸国に綸旨（りんし）をばらまいた。至るところにアンチ幕府軍がおこり立ち、ついには足利尊氏までもが幕府に愛想をつかし、鎌倉幕府は滅びてしまう。

こののち、足利尊氏が反逆し、一度はまけて九州へのがれるがまた力をとりもどして攻め上がってくる。このとき正成は尊氏軍を京へ入れて囲むという作戦を献じたが、うけいれられず兵庫で新田義貞とともに戦うことになった。このときすでに死を覚悟した正成のとおりに６時間の血戦の末、正成は自殺した。いくら戦術にたけている正成といえども目にあまる大軍になすすべもなかったのである。

この正成という人物はかなり頑固であったと思う。幕府を倒した立役者でありながら、恩償はわずかであった。自分たち中心主義の公家に対して尊氏のように怒りもせず、最後まで天皇に忠誠を誓ったのである。彼はかなりかしこい人物であったはずなのになぜこれほどまでに天皇に忠実なのか。それには、彼がまだ河内の住人であったころに天皇によってひきたてられたという恩義があったためだと思う。ぼくは今まで「長いものにはまかれよ」の精神で生きてきた。しかし、今、正成の生きざまに男のロマンを感じた。これからは『栄光ある頑固』を目標として、頑固に生きていこうと思いはじめた今日このごろである。

「中国工匠伝　景徳鎮からの贈り物」を読んで

（陳舜臣　著）

3Ｅ　伊木　麻由未

この本は、表題作をはじめ８作品が収録された短編集である。内容は、刺繍・夜光杯・陶磁器・筆・七宝等の中国の工芸品の制作に携わった人々についての言い伝えられた話やまた、またその品に関する伝説などであった。同時に、その時代背景も記されているが、何でもないような１つの物が史実と間接的に関わっていたり、ただの偶然が後々語り伝えられ、世界的に知れわたる品物を生みだす結果になったりといった話もあり、なかなか興味深い本だった。もし、その偶然や物がなかったと考えると、現在では別の物があったかもしれないし、後世まで名を語りつがれる人物や今現在の史実にはない事件が起きていたかもしれないのだ。そう考えると、歴史物を読む楽しさというものがわかる。

これらの物語から分かるのは、史実に何らかの関わりがあったということだけではない。全ての作品の中では、それぞれに価値のあるものがでてくる。その価値は、世間の人に認められたということだけではなく、作った工匠にとっての理想のものであったりということである。では、その価値を得るための努力はどこで生まれたのか。それは、工匠としての「欲」から生まれた。最初の話ノ「金魚群泳図」では、主人公で刺繍の名手といわれた張晋渓という男は、流刑の地からの脱出のために見事な刺繍の壁掛けを作ったが、それは、「故郷に帰って本当の刺繍がしたい。」という思いからであった。「湖州の筆」の話で登場した馮応科という男は、商売のための筆をつくる口実で、新しい「時代の字」をかくための新しい筆をつくっていた。このように、口実としての欲望の根底にあるのは、職人として理想を求めたいという欲望なのである。

このような欲から生まれた作品もあれば、偶然出会った東西の文化の融合によって生まれたものもある。日本の文化との違いはそこにあるのだと思った。日本の場合は、影響を受けたにしても中国経由であったし、直接伝えられたにしても、主にヨーロッパの国のものであったりそれに影響されたというものはない。が、中国の場合は、西側の国々、ヨーロッパやアラビア諸国のものが直接伝わり、元々あったものに組み込まれ新しいものが生まれた。

このようなことから、この本によって歴史と文化の関わりをほんの少しではあるが、考えさせられたような気がした。

随想・読書雑感

読書に見る『中国と私』

M５　本庄谷　拓

風邪をひいて休んでいたがためにこの読書感想文なるものを書くハメになってしまった。とりあえず引き受けてはみたものの、最近、感想文を書けるような読書をしていない事に気が付いた。というわけで、今さらあせって読書をすることも面倒なので、私の読書について書いて見ることにした。

私は小学生の頃から読書好きな根暗なガキだったのだが、今一番好きなジャンルは“中国もの”である。おそらく読んだ本の数もこいつが一番多いと思われる。

今と言っても私が中国について興味を持ったのは小学６年生のとき、「史記」を読んでからである。この史記、漢の武帝期、大史令という歴史を記録する職にあった司馬遷の書いたもので、原文は当然漢文で書いてあるだろうから私などにはとうてい読めはしない物ですが、このとき読んだのが誰の訳だったのかすでに忘れてしまいましたが、子供用ということもあってか、とても分かりやすくかつ楽しく読めたことを記憶しています。

さて、“中国もの”と言えば「三国志」。ある友人などはゲームをより理解するために読んでいましたが、最近はすごいブームで、知らない人はいないんじゃないでしょうか？私もこの「三国志」は大好きで、何と言っても有名なのは吉川英治氏の書かれたものなのでしょうが、他の人の書かれた「三国志」もたくさん読みました。日本の「忠臣蔵」と同じく、史実がベースにあるだけに書きやすいのでしょうか？　あまりに奇想天外で、諸葛孔明が神様のようになっているものもありましたが、やはり史実を離れすぎると戴けないという部分もありました。しかし、たいてい誰のものを読んでも楽しく読めました。私は柴田練三郎氏の「三国志・英雄ここにあり（全３巻）」をお勧めしておきます。

“中国もの”には他にも「水滸伝」など有名なものもたくさんありますが、字数が少ないので省略させてもらって、私がこの中でさらに好きなものと言えば、始まりが「史記」だった事もあってか、「春秋戦国期」について書かれたものなのです。どうやら私は「三国志」にもみられるように国と国、人と人との駆け引きに興味をそそられたようです。この時代のものでも諸子百家について書かれた物をたくさん読んでいます。

昔は春秋期の覇者、戦国七雄を統一した秦の始皇帝にあこがれて、『男と生まれたからにはこうなりたい』という思いから帝王学でも学ぶつもりで諸子百家の書を読みあさっていました。が、今では時代が違うという事を悟り、“時を越えて通用する大陸的な思考術”を学ぶべくこれらの書を読んでいます。本当に国のスケールが違うせいか、この諸子百家の言う事もピンからキリまで様々ですが、みんな極端で、究極まで考えていて中途半端さを感じさせない切れ味の良さ、大きさがあり、とっても勉強になります。これが日々の生活および自分の性格に活かせれば良いのですが、なかなか難しいものです。

ここしばらくは“中国もの”から離れていたのですが、この前、私がファンである緒方拳さんのリポートする「万里の長城」という番組がテレビでありました。壮大な万里の長城を追って中国10万キロを駆け抜けるというもので、私はこれを見て再び中国に目覚めてしまいました。この番組は故・井上靖氏の企画されたもので、本も出るそうなので是非とも購入してみたいと思います。また、これから中国語を勉強して、中国語

で書いてある様々な書を原文を読めたら、さらにそのうち広大な中国大陸をさまよえたらいいな、と思っています。

『西郷隆盛の遺書』

（伴野　朗著　新潮社）

Ｅ５　福田　善道

「アラヨウ！宿ンしは、こげんなお人じゃなかったこてえ！」西郷隆盛が西南の役で没してから21年後、上野公園に建てられた彼の銅像の除幕式の際、除幕されたその銅像を一目見て西郷未亡人のイト子は、こう口走ったという。

西郷隆盛という人物を、私たちはよく知っている。歴史の授業に彼は必ず登場するし、一昨年のＮＨＫの大河ドラマにも取り上げられた。何しろ上野に、あの銅像がある。そのおかげで、彼の名前を聞くとすぐに私たちは彼の顔（太い眉、大きな眼、どっしりと太い鼻、真一文字に結んだ口元）さえも思い浮かべることができる。しかし私たちは、本当に彼のことをよく知っているのだろうか。もっと言えば、“本当の”彼のことを、である。

西郷隆盛を写した写真がないことを、私はこの本を読んで初めて知った。では、あの銅像（高村光雲の制作であるらしい）は何をモデルにして作られたのであろうか。答えは（イタリア人で紙幣の原版を作るために日本に招かれた）キョソーネが、明治16年に描いた肖像画ということである。なる程、納得…ん？明治16年？と思った人は、恐らく日本史の好きな人であろう。西南の役は明治10年のことであり、その年のうちに彼は自刃しているからである。つまり、その肖像画も彼の死後６年が経ってから描かれたということになる。しかもそれは、顔の上の部分が弟の従道、下がいとこの大山巌をモデルにした、いわばモンタージュであったらしい。驚くべきことに、写真だけでなく彼の生存していた姿を伝える肖像画もないのである。その上、冒頭で述べた言葉を彼の妻がつぶやくのだ。私たちは本当の彼の顔を知っているなどと、どうして確言できるだろうか。

では何故、彼の写真も肖像画もないのか？その真実を知る人は恐らくいないだろう。しかし、ここで著者は推理を働かせるのである。

①写真：彼は晩年特に、写真嫌いであったようだ。しかし、写真好きの藩主斉彬の寵臣であった若いころの写真も無いのは、彼が薩摩藩のいわば情報長官で秘密裏に情報工作を行う必要があったからではないか。（実際、それを裏付けるような行動を彼は取っているらしい。）

②肖像画：西南の役の結果も決定的となった頃、鹿児島の町に現れた謎の人物達が、彼の肖像等を集め持って行ってしまったのではないか。その背後にいたのは、大久保利通であるらしい。

（ちなみに著者は、この人物達の鹿児島捜索と、死の直後に彼の遺体の入念な検死及び持ち物検査が行われたことから、大久保が西郷隆盛の遺書を捜していたのではないか。そして大久保をこのような行動へと促したものは、西郷の強い影響力への恐怖であり、その影響力を少しでも減らし、彼のそのイメージを拭い去るために彼の顔をまず消滅させようとしたのではないだろうか。と推理している。）

彼の強い影響力と言えば、あの『大津事件』も彼のその影響力が関係しているそうである。つまり城山で彼が死んだ後も長い間生存説がささやかれ、特に明治24年、それまでロシアに逃れていた西郷が、ニコライ皇太子に随行して帰国するという噂が全国に広まった。この事で明治天皇が「隆盛帰らば、それかの10年の役に従事せし将校らの勲章をはがんもの也。」と述べたと報じられたのを聞いた津田巡査（この人は西南の役に従軍して昇進。勲章と金100円を下賜されている。）がノイローゼ気味となっていたのが、この事件の一因と言われているのである。

この本は単なる歴史小説ではなく、歴史推理小説とでも言えるものであって、楽しみながら、一気に読み切ることができた。そして、以上述べた他にもよく知っていたはずの西郷隆盛について多くの事を知った。ある意味でこの本はＴＶの『知ってるつもり!?』のように、知ってるつもりでも知らないことがたくさんあるということを、又それだからさらに学ぶことに魅かれるのだということを教えてくれたように思う。

新任教職員随想　（その２）

「学生諸君！
英語にもっと強くなろう!!」

機械工学科教授
池上　廉平

皆さん御存知のとおり、私は昨年４月、三菱重工業より当校に来て、生まれて初めて先生を体験しております。担当は機械専門科目と「工業英語」です。

まだ新米の私は、毎日、新しいことに遭遇しては、目を白黒させている次第です。従って、本校の学生諸君の英語に関する実力の程はよくは判りませんが、どうも、皆さんの大半は、これから益々国際化が進む企業社会へ乗り出すのには、英語力が少し不足しているのではないかと懸念しております。

諸君が、今後企業で活躍されるには、高い技術力と共に、強い英語力が必要であると思います。少しオーバーに言えば、“技術ポテンシャルの高い皆さん”の社会における成功の鍵（ＫＦＳ）は「英語の力」であると断言してよいと思います。

では、企業で、現実に、どのような面で英語が必要であるかにつき、私の経験した工作機械製造業の場合を例にとって、説明しましょう。

１）日本の機械製造業の国際的な歩みと必要な英語力

これを工作機械製造業の場合で言えば、その国際的歩みは大きく次の４段階に分けられ、そして、各段階の業務遂行に必要な”専門の技術力”と“英語力”のレベルは、次表に示す程度ではないかと思います。

（Ａ）わが国の工作機械製造業の国際的な歩み

(1)　欧米先進技術の習得　　1965年頃まで
(2)　世界市場での製品販売　1975年頃より
(3)　製品の海外現地生産　　1985年頃より
(4)　欧米企業との協同開発　1993年頃より

（Ｂ）国際的業務にたずさわる技術員に必要な能力

	専門の技術力	英語力			
		読む	書く	聞く	話す
欧米技術の習得	3	3	3	3	3
世界で製品販売	2	2	2	2 −	2 −
海外現地生産	1	2 +	2 +	2	2
欧米と協同開発	1	2 +	2 +	2 +	2 +

（註１）専門技術力　３級：高専卒経験５－７年
　　２級：同10－12年、１級：同15年以上
（註２）英語力は一般または工業英語検定の等級

２）英語に強い技術員が活躍する企業の国際的事業

企業の国際的業務の中で、現在急拡大しているのが日本製品の海外現地生産と、部品の国際調達です。

では、この海外現地生産の推進に英語の力がいかに重要であるかにつき、私の経験を話しましょう。

三菱重工では、1990年夏、米国ケンタッキー州西部に新工場を建て、ＮＣ工作機械（マシニングセンターとＮＣ旋盤）の現地生産を開始しました。私は、広島工機工場で、最後の２年間を、このプロジェクトリーダとして、これら製品の米国現地生産立ち上げのための技術諸準備の推進に当りました。

その準備は図面、部品表など設計資料の英文化、生産の全工程の英文マニアルの作成、治工具の準備等大変でしたが、最も難儀をしたのが、殆ど素人の米国人に“物造り”を、しかも高度なスキルを要する工作機械の製造技術を短期間で教えこむことでした。

３）海外現地人への製造技術教育

（Ａ）グループ・リーダに広島工場で導入教育をした
（Ｂ）全作業員に現地でＯＪＴ教育(実地指導)をした。

上記の米国人への技術教育を通して、次の３点が非常に重要であると再認識した次第です。

(1)　マニアルは、作業者のレベルに合わせて、抜けなく、親切に書くこと
(2)　各作業は何故そうしなければならないか？の理屈を、作業者によく説明すること
(3)　彼らの質問には、その場で直ちに、正しい答を返すように努めること

言ってみれば、これら３点は素人に物造りを短期間で教える時の必須事項ですが、**相手が外国人であれば**

その上に、正しく、判り易い英語で、誠意をもって対応することが必要であります。

このプロジェクトは、幸にも、三菱広機の多くの英語の出来る技術員のサポートと、現地の人々の真面目な努力があった結果、立形マシニングセンターの現地生産を半年少々で立ち上げる事に成功した次第です。

以上、機械製造業を例に英語の必要性を述べましたが、要は、国際化の一層進む、これからの企業社会において、活躍が大いに期待される学生諸君は、在学中に、工業英語に関する本など読んで、英語力をもっとつけられるよう、切に希望してやみません。

（参考書）　工業英語の実際　篠田義明著　日経文庫
工業英語入門　　A．J．ハーバート著　創元社
工業英語へのワンステップ　　日本工業英語協会
工業英語へのアプローチ（1－2級用）　同上

遺伝子と人生

機械工学科講師
深澤　謙次

中学3年の時“将来何になりたいか”というアンケートがあったが、確か

第一希望　　物理学者
第二希望　　映画監督

と書いた記憶がある。物理学者と書いたのは実は、隣に座っていた友達がこう書いたのを真似をしただけで最初は映画監督と書いたのである。物理学者にしろ映画監督にしろあこがれていたのは確かだが、本気でそう思っていた訳ではない。だからそのときは本当に物理学者になるとは思わなかった。

現在私は物理学者の端くれになってしまったが、今でも時々映画を撮ってみたいと思うことがある。しかし映画を見れば見るほど映画監督は難しいと思ってしまう。1つ1つの構図の撮り方であるとかキャメラポジションの決め方だとか、そういう事は学ぶことができるだろうが、何をどう表現するかは結局才能の問題ではないかと思う。では自分に才能があるかというとあまり自信がない、自信がないから映画監督は難しいと諦めてしまうのだ。しかし物理学者になれないとは思わなかった。この辺に映画監督になるか物理学者になるかの境目があるようだ。

最近の動物行動学では生物の主体は遺伝子でありその生物の体は単に遺伝子の乗物に過ぎないというふうに考えられている。遺伝子は自分と同じ遺伝子を増やすためにその生物に子供を生ませる。もし子供が生存するのに障害が生じた場合、その障害を取り除こうとする。例えばゾウアザラシは一度に多くの子供を産むが母親のミルクには限りがあるので他のゾウアザラシの子供がミルクを貰いにきてもミルクをあげない。ミルクをあげてしまうと自分の子供にあげるミルクがなくなってしまうからだ。そして場合によっては他のゾウアザラシの子供を殺してしまう。そうすることによって同じ遺伝子を持った自分の子供が生存できるようにするのである。つまり他の遺伝子は生存できなくても構わない、自分と同じ遺伝子が増えれば良いと遺伝子が考えるというのである。この意味で利己的な遺伝子と呼ばれたりする。このように生物の行動は遺伝子によって決められているとするのが動物行動学の考え方である。

この考え方が正しいとすると人間の場合はどうなるのだろうか？人間も生物の1つであるが、人間の行動が全て遺伝子によって決められているとは考えにくい。基本的な行動や性格などは遺伝子によって決められているかも知れないが、後天的な影響で変わる部分もあるだろう。だから好みが変わることはあっても性格が大きく変わることはあまりない。しかし基本的な行動が遺伝子によって決められているとすると将来何になるかは遺伝子によって大きく左右されるかも知れない。そうだとすると映画監督になれないと思ってしまったのは私の遺伝子が映画監督に向かない遺伝子で“才能がない、才能がない”とささやいてそう思わせたからかも知れない。また、物理学者になったのは遺伝子がそういう遺伝子で“なれる、なれる”とささやいていたのかも知れない。

こう考えてくると将来は親から遺伝子を貰ったときに決ってしまうように思える。親から良い遺伝子を貰えれば将来は明るいし、あまり良くない遺伝子を貰っ

てしまうと将来は暗い。しかし自分の人生が遺伝子で決ってしまうと考えるのは気持ちのいいものではないから、これは間違っていて欲しいものだ。

ハイテク社会と技術者

電気工学科助教授
小林　康秀

ノイマン型のコンピュータが誕生し、40年以上経過するが、この間に、半導体、デバイス技術を中心にするハードウエア技術、情報処理を中心としたソフトウエア技術、加えて光通信、ディジタル通信、伝送技術の革新的な進歩との融合により、その応用分野は広範囲に及んでいる。中でも、ＯＡ（オフィス・オートメーション）ＦＡ（ファクトリ・オートメーション）あるいは金融、流通、行政、医療など現代社会において快適な生活をするうえで不可欠なものとなっている。

一方、システムの社会化、大規模化に伴う信頼性、コンピュータ犯罪、プライバシーの侵害などセキュリティ、機械化に伴う人間疎外、テクノストレスなど多くの解決すべき課題も発生している。

「ハイテク社会と労働」（森　清著、岩波新書）は、こうした電子計算機を利用した社会の中で、人々の労働条件がいかに大きく変化し、新たな問題を引き起こしているかについて述べている。

富士山麓のあるロボット工場では、ロボットがロボットを作っている。ロボットたちは、コンピュータに入力されたプログラムに従い、昼夜を問わず働き続けている。深夜、薄暗い無人の工場内で、ロボットたちが作業に励み、明かりのない通路を無人搬送車が動きまわる光景は、無味乾燥で気味が悪い。

また、ＯＡの現状ルポでは、インテリジェントビルの実際例として、大阪の梅田センタービルが紹介されている。ビルの各所にコンピュータの端末機が設けられ、それらがネットワークで結ばれ、利用者が求める情報を一瞬のうちに得ることができる。あたかも「ビルが知性を持った」かのような錯覚さえ覚える。

しかし、本書の著者は、そのような見方を「あまりにもおおらかで、技術がもたらす事柄への洞察に欠けている」と批判している。例えば、インテリジェントビルの場合、各所の監視用テレビカメラが配置されている。出退時は、ＩＤカードで管理される。ＦＡが徹底するロボット工場では、従業員参加の品質管理運動も存在しない。ロボット進出で、人の力が発揮される部分が狭くなっているのだ。

これらは、ハイテク社会の労働の「陰」の部分であろう。プログラム開発者の約80％は「疲れる」と答えている。徹夜の連続で35才までで使い捨てと危ぶむ声も一部で耳にする。それでも、ロボット化を超えて、人間と機械の理想的な関係を求めて、挑戦を続ける人々も本書では、描かれている。

私の専門は、制御工学であり、そもそも自動化・省力化・高品質化を目指し、人間の労働条件を緩和したり幸福をもたらすはずの学問が、ある部分では逆に作用することもある。これらに対処するため、制御関係の学会でも、最近は、「人間にやさしい制御」を目指し、インターフェースを工夫したり、人間の感覚・感性を取り入れた制御の研究が盛んになっている。

科学技術者がその専門を究めることは重要なことであるが、開発技術による自然環境、人類あるいは人々の精神的な内面にも目を向けていかなければならない。

本校の学生は、やがて世界の最先端を行く日本のハイテク産業の担い手ととして活躍することになる。企業活動に積極的に参加することは当然であるが、現場の技術者１人１人が、ハイテク社会が生み出した新たな問題点についても無関心であってはならないのではないだろうか。

——利用について（お願い）——

▶〈転貸禁止〉◀

最近，「貸出図書」や「利用票」の転貸による事故・トラブルが発生しています。

決して他人に貸与しないで下さい。貸与により事故が生じた場合は，利用票を交付されている者の責任となります。充分に留意して下さい。

私の趣味

学生課学生係長
河井　孝之

コツンと当りがあると、ゆっくり竿を上に動かしてやる。するとググッと締め込み、糸をギューンと鳴らす。思わず竿を立てると、またググッと引き込む。そこで体を低く保ち、魚を浮かせ手前に引き寄せる。頭を水面に出すとバシャバシャと暴れたりする。何んとも言えないやり取りの瞬間である。

これは、昭和57年７月10日（土）江田島大須港桟橋にて半夜釣をした時の釣日記の一部である。当日は旧暦の５月10日、釣果は軟調ノベ竿の探りによる良型メバル10匹であった。

私とメバル釣りの出合は、昭和55年５月のことである。広大の学校教育学部に配置換になったばかり、当時教務委員長をされていた教授に能美島へ連れて行ってもらい、20数匹釣らしてもらったのが病み付きとなり、以来12年近くこの小さな大物を追い続けている。最近の釣行は、年４～５回であるが、多い頃は月４～５回は出かけたものである。

元日、先生から久しぶりに年賀状をいただき、“釣りを楽しんでいますか”のコメントがあった。自分も長い間釣行していなかったので、急に先生を誘ってみたくなり、正月早々奥さんに後ろめたい気持ちはあったけれど、敢えて電話をすることにした。案ずるより生がやすし、話しはすぐ決って江田島で初釣をすることになった。先生との釣行は実に一昨年３月以来のことであったが、術後のためあまり遅くまで釣ることはできず、引きの５分午後11時納竿とすることで出発した。午後４時現地に着いてみると、無風で絶好のコンディションであり、期待しながら竿出しをした。満潮までに先生はコンスタントに約10匹（人の釣果が気になるようでは自分は釣れてない証拠）、自分は１匹のみで焦を感じ、仕掛を色々変えてはみたが思わしくなく、付近を探って歩くことにした。10時頃までにやっとの思いで10匹位釣ったが、先生も自分も不満であった。約束の時刻は迫っていたが、場所を変えて再度挑戦することにし、そこで釣れなければ帰ることにした。今度の場所は、道路からすぐ近くにポイントがあり、いかにも釣れそうな場所であった。附近にはガラ藻が点在しているため、ノベ竿による浮き釣りで試みることにした。竿を入れるやいなや自分に立て続けに３～４匹良型が釣れたため、先生も俄然やる気になられ、二人共暫くの間集中した。気が付くと約束の時刻を２時間半も経過しており、急いで帰路についた。目が覚めて、女房に昨夜の釣果を聞き、私は釣日記を書き始めた。

何故この釣りなのか、自分なりに考えてみると、小さい割に引きが強く、１年中釣ることができて、しかも数釣りができる。決して上手でない私でも、今までに何回かは一夜に50～60匹釣ったこともあり、普通でも10～20匹は竿に掛ける。友人など３桁釣ったと話してくれたこともある。初心者でさえ、最初からボーズになることも殆どなく、入門しやすい釣魚といえる。けれどもメバル20～30匹までなら誰でも到達できるがそれ以上となるとなかなか難しい。メバルの数釣りの魅力は、そのままメバル釣りの難しさとも言えるのである。最近は、釣り人口が増え、魚影も薄くなったのか以前のように大釣りをすることはなくなった。しかしこのような状況になればなるほど、何故かこの釣りはファイトを起こさせてくれる。次回に如何に備えるか考え、研究させてくれるのがたまらない魅力なのである。このため冒頭に記した日記等により過去のデータを見たり、専門書を読んだり、生態・気象に関心を持ちながら、大釣りを夢見ている今日である。

――利用について（お願い）――

▶〈返却期限〉を守って下さい◀

最近、貸出図書の期限超過が目立って多くなっています。殆どの図書が１冊しか所蔵していないものばかりです。お互いが有効に利用できるよう、期限までに返却して下さい。延長希望があれば、更新（２回まで）も出来ますので手続きして下さい。

由無し事

会計課（出納係）
事務官
林　昌代

図書に関係するような事を書いてもらいたい、と言われたが感想文を書けるような小説など全然読んでないし、仮に読んでいても、感想文なんて学生を卒業してまで書きたくない。図書に関することねえ、と尻取りのように連想してみたら、紀伊國屋書店にたどり着いた。ここまで来るのに、約１カ月程かかった。

８月ごろ、「図書だより」に新任者随想を載せることとなり、私は12月ごろに原稿依頼を受けるらしいというのを耳にした。その時は、えー。うそー。嫌だな。でも、まだ大分先だし。と思っていた。が、月日が過ぎるのは早い。12月中頃、図書係長が、「林さん。これ、お願いします。」と、原稿用紙を差し出された。思わず、えっとたじろいたけれど、すぐに笑顔で、「ハイ。分かりました。」と答え、原稿用紙を手にしていた。添付用紙には、「林殿」と書かれており、あちらの方は、気を使われている様子。それに書いてあった文中に、「……快くお引き受けいただき……」とあった。私が原稿を受け取った時に、それが添付されていた訳だから、私は快くお引き受けざるを得ない運命と決まっていたのである。本当は快くなかったのよね。嫌だな。書きたくなあい。と駄々をこねて、突き返したかったけれど、そんな事出来る訳ない。快くお引き受けした（？）以上は書かなくてはと思ったけれど、苦手なものは後に回したがるのが私の性格。まだ、書いてないことが見抜かれたのか、「冬休みの宿題と思って、頑張って下さい。」と言われた。そうか、冬休みの宿題かあ。どうせ冬休み暇だから、学生気分にでも戻って、机に向かって書き上げよう、と思ったが、思うだけ。休みは疾っくに終わってしまっていた。しかし、予定通り学生気分には戻っている。学生時代、休み中に宿題を終わらせた覚えがない。提出期限日間際になって、どうしよう、どうしようと焦ってやっていた。この原稿の提出期限までを、じゃん拳のチョキやピースで表すことができる今日、焦って、書いている気分は、正に去年までの私と同じ学生時代の気分。

長々と、前置きを書いてしまったので、早速、紀伊國屋書店について書こう。紀伊國屋書店へは、私の趣味に関する本が多く取り扱われているので、月に一度は必ず足を運んでいる。今月号は、もう出てるかなあと心弾ませて、雑誌コーナーの或所へ行く。山積みになっている。御陰できれいなのが選れる。この本を立ち読みしてる人達を見ると、あー、この人もファンなのかあ。仲間、仲間、と変に親近感を持ってしまう。私は、この本を家に帰ってから、めくることにしている。その時、ページを飛ばすようなことはせず、きちんとページ番号順にめくる。そうすると、次は何が書いてあるんだろう、どうなっているんだろう、という楽しみがあるから。何かワクワクする訳。これは、この本を読む時の私のこだわりってものかな。無事に買うことが出来たら、今、流行の、ウォーリーを探しに行く。途中、英会話の入会をしている所がある。チラシを差し出し、「如何ですか？」とお姉さんが声を掛けてくる。ティッシュやシャンプーなどの試供品なら、手が出るけれど、ゴミ箱の肥やしになるものは、お断り。「いいえ、結構です。」と決まり文句を言って通り過ぎる。ウォーリー君を探すのは、中々難しい。某食品会社のテレビＣＭのようにはいかない。それでも、適当に満足出来たら、あちこちをブラブラして、紀伊國屋書店をあとにする。所要時間２時間弱。これが私の紀伊國屋書店での行動パターン。

この原稿を書く事も仕事の１つ、と勝手に決めつけて、１日中、ライター活動に専念した甲斐あって、提出期限を守れそうだ。嫌だなあと思いながらも、書き終えてみると、ダラダラと書いてしまったものだ。この原稿が「図書だより」の一部となって、人様の目に止まるのかと思うと、恥ずかしい・・・。

▶５年生へお願い◀

卒業研究等で忙しい時期だと思いますが、卒業前までに、現在借用中の図書はすべて返却するようにお願いします。

多くの出会い

学生課（実習係）
技官
田村　忠士

私が、呉高専の職員として、採用されて、もうすぐ1年が過ぎようとしています。今、ふりかえってみると、昨年は、私にとって社会人1年目の年であると同時に、とても多くの人との出会いのあった年でした。

まず、いうまでもなく、この呉高専に来てからのいろいろな人との出会いがありました。職員の方、教官の先生、そして学生と、それぞれ、まったく立場の違う人たちとの出会いがありました。その他には、私が趣味でしている軟式テニスのクラブ、又、試合等に行ったりして知り会った人も数多くいました。

私は、このように多くの人たちと出会えたことは、とても幸せなことだと思います。例えば、私が、それだけ多くの人たちと出会えたことは、いってみれば、いくつかの偶然が重なって起こったことだと思うからです。もし、私が呉高専に来ていなかったら、出会った職員の方や、教官の先生、学生とも出会うことはなかったはずです。逆もあります。今まで出会った職員の方や、教官の先生、学生、そのうちの1人でも、この呉高専に来ていなければその人と出会うことはなかったかもしれません。でも、私が呉高専に採用になり職員としてきたこと、そのほかの人たちが、呉高専にきていたこと、そういった偶然が重なって、今、こうしていっしょに仕事をしたり、話をしたりすることができるのだと私は思います。もしこの偶然がなかったら、ずっと出会うことなく、お互いに、街ですれちがう人たちのうちの1人でしかなかったかもしれません。

他にも、多くの人たちと出会ったことで自分にとってプラスになることもあります。

例えば、1つの物事に対する考え方も、人それぞれ違います。だから、多くの人たちと出会い、話をしていけば、いろいろな意見を聞くことが出来ます。そうすれば、これから、自分が社会で生活していくうえで相手の立場や、いろいろな事情を理解しながら物事を考えていくことができます。また、これは、人それぞれ、その度合いが違うと思いますが、ある人との出会いが自分の人生の turning point となることもあります。

このように出会いは、私たちに多くの財産をもたらしてくれます。

私にとって昨年は、このような出会いが数多くあった年だと思います。そして、これからもこのような出会いを大切にしていきたいと思います。

会社での想い出

土木工学科技官
小松　孝二

私は他の教職員の皆様より1ケ月遅れの5月に赴任いたしました。5月採用ということは、1年生の皆さんより後輩ということになります。

ここに来るまでは四国の高松市という所で1年余り測量設計の会社で勤務していました。測量というのはとても面倒で手間のかかる作業ですが大変重要で、どんな構造物を作るときにも基礎となるものです。ダムやトンネルなどの測量にも私はよくでかけました。特にダムなどは現場が主に山奥である場合が多いので、先輩たち数人と出張という形をとって遠く県外の現場までよく足を運びました。一度山奥の現場へ入ると危険を伴うこともあり、特に夏などはすずめばちにささたりまむしという毒へびに出逢ったりすることもたびたびありました。やっと仕事が終って旅館に帰ってもこんなところには娯楽などはほとんどないので、毎日酒を飲んだりするか、ふもとの街へ行ってパチンコをするかの生活をしていたので測量技術よりはむしろパチンコの技術をみがいていたような気がします。このような出張生活は1年の半分にも及びました。

又、会社へ帰っても測量結果のデータ整理などもあ

り、夜遅くまで残業したり時には徹夜になることもありました。仕事の面ではかなハードでもありましたが貴重な経験ができ充実した１年を送ることができたと思います。

最後に私が推薦する本を紹介したいと思います。それは皆様も作者の名前をご存知の方々も多いと思いますが、シドニィ・シェルダン原作の、「明日があるなら」という作品です。

この本は、トレイシー・ホイットニーという美しい女性が罠にかけられ騙されて生きる希望を失います。それでも人生のどん底から這い上がって自分たちを落とし入れた男たちに復讐する、というのがこの本の前半のあらすじです。他にもこの人の一連の作品は大変面白く人気があり、「真夜中は別の顔」という作品が最近ドラマ化されたほどなので、是非一度読んでみてはいかがでしょうか。

私の推薦する本

五味川　純平著

「『神話』の崩壊　関東軍の野望と破綻」

（文春文庫）

一般科目教官　有廣　圭司

昨年は「パール・ハーバー」50周年という事で、多くの著作が出版され、また様々な特別報道番組が作られた。また俗にいう「満州事変」勃発60周年であった事も忘れてはいけない。太平洋戦争へと続く満州事変は、関東軍（満州国－中国東北地方－に駐留する日本軍）による陰謀事件で、1931年（昭和６年）９月18日の奉天(現在の瀋陽)郊外の柳条溝での鉄道爆破をもって始まったとされている。著者は満州に生まれ、東京外語卒業後、満州昭和製鋼所に入社し、鞍山本社に勤務し、’43年（昭和18年）召集をうけ、ソ満国境の部隊に配属された。当時、関東軍が存在する限り、自分たちは安泰であり、人々の間に「無敵関東軍」といった神話が作られていった。’45年（昭和20年）８月、ソ連の参戦によって、著者の部隊は全滅に近い損害をうけ、生き残った著者は東部ソ満国境を転々とした。関東軍の潰走と共に、人々の彷徨がはじまり、親子の離散がはじまり、「残留孤児」が大量に生まれた。特に、開拓団の人々は45％が死亡したと言われている。本書は出先機関であるのに本国の統率を越えて、次々と謀略、侵略を企図した関東軍、それを可能にした天皇制下の統帥権（軍隊の最高指揮権、明治憲法はこれを天皇の大権と定めた。一般国務から独立し、発動には参謀総長・軍令部総長が参与した）の不羈（おさえつけにくいこと）と不合理を怒りを込めて明らかにしている。関東軍の歴史の中で重要なノモンハン事件をあつかった「ノモンハン」、ソ連軍侵攻時の戦闘経過をのべた「虚構の大義」、企業の植民地支配の実態、国境での戦闘・敗走をえがいた「人間の条件」などの著書もある。是非、これらを通して日本人は中国で何をしたのかを知る手懸にして欲しい。

黒澤　明著

「全集　黒澤　明　１～６」

（岩波書店）

機械工学科教官　京免　進

これは映画監督黒沢明の映画脚本集で、最近の２作を除いた作品全てである。彼は日本を、いや世界を代表する映画作家であることはよく知られている。現在80歳を越えたがまだ現役で映画を作り続け、昨年は「八月の狂詩曲」一昨年は「夢」を作った。これらの作品は往年の代表作と比較しても遜色のないものであり、これは年齢から考えると驚異的である。昨年11月に公開されたリバイバル作品「七人の侍」を見たが、すでに約30年前の作品であるのに少しも新鮮さをなくしていないのは驚きである。しかも全国的にかなりヒットしたとのことである。この事実は現在の日本映画が実につまらないものであるかを物語っている。私は洋画を主体に見ているけれど、世界に通用するのは日本では黒沢作品しかないと思っている。同じ映画をもう一度見ようかと興味を示す作品は世界的にみても数少ないけれど、黒沢作品だけは何回見ても素晴らしく、しかもそのたびごとに新しいものが発見できる。アカデミー賞を受けたのもうなづける。しかし日本では彼を十分に評価していない。これは日本の文化レベルが低

いためであろうか。彼の作品は約30本あり、一概には言えないけれども、駄作が全くない。どれをとっても特色があり、多種多様でワクワクさせるものがあり、共通しているのはどの画面も充実しているということであろうか。しかも面白い。

学生諸君に見てほしいのは、やはり昭和20年後半から40年代の充実した時期の作品であろうか。「七人の侍」「隠し砦の三悪人」「用心棒」「椿三十郎」「天国と地獄」「赤ひげ」のどれでもよい。まず見てほしい。面白さは抜群であり、今の日本映画など見る気にはならないだろう。

本書は脚本集であるが、映画をみるだけでなく、これを読んでも実によい。書評とかけ離れてしまったが、日本が誇る映画監督の作品を知ってほしいということで書いた次第である。

Benjamin Arazi著　佐々木　彬夫　訳

「わかりやすい誇り訂正符号」

A COMMONSENSE APPROACH TO THE THEORY OF ERROR CORRECTING CODES

（共立出版）

電気工学科教官　横瀬　義雄

最近では見ることの出来なくなった30㎝レコードに代わり12㎝のＣＤが登場し、アナログレコードからディジタルレコードへと移り変わる際に、単にアナログ値をディジタル値に変換し記録するのではなく、そこに符号理論（誤り訂正符号）を取り入れアナログレコードでは髪の毛のよう傷が入るだけで音の劣化・再生不能となったものを誤り訂正符号を使い多少の傷では記録した音をそのまま再生可能とした。

ディジタル・データを記録したり送信したりするときに誤り訂正符号は今日必須のものになっている。

しかし誤り訂正符号そのものを専門書で理解するのはたいへん困難で、概念のあたりで興味も薄れ本文に入らない内に投げ出してしまう可能性があるが、本書では誤り訂正符号に付いて取り付きやすく理解しやすい形で、符号理論そのものを表現している。

本書の内容に付いて、通信システムへ誤りがどの様に影響するかというところから、誤り検出に付いての考え方から始まり、付録として実際にＣＤやＤＡＴ等に使用されているＲｅｅｄ－Ｓｏｌｏｍｏｎ符号（ＣＤのカタログや取扱い説明書等に記録方式として書いてある）に付いてまで述べてある。

また本書の初めの１・２章では「本章で述べた概念の復習」と題しその章で取り扱われた用語等の説明が簡単に記されていたり基本概念が章の初めに列記されていたりし、非常に読み易い構成となっている。

日常生活には登場するが、あまり原理に付いて知られていない或いは存在すら知られていない誤り訂正符号であるが、なぜＣＤに傷が入っても音を再現できるのか、ノイズの多い電話回線でコンピュータ通信を行ってもなぜ正常に通信が行えるのかと疑問に思われる方は入門編として、この本で原理をつかんでほしい。

夜間開館担当者より

図書館（夜間）に勤め始めて思うこと

図書係事務補佐員

中島　教江

図書館に勤めに出るまでは、ゆっくり本に親しんだ記憶もありません。調べもののために本屋さんに行くか、趣味の本や、雑誌を読む位でした。今、よいチャンスが与えられ、本の中での数時間を有意義にすごして、読書の楽しみを覚え、読書の習慣を身につけていきたいと思っています。

夜間の図書館利用状況は、テストの前、数日間は、利用者も多くて、閲覧席が満席近くになることもありますが、多すぎると、学習という状態ではなく、何となく雰囲気が、ざわざわしている様な時もあります。ただ、本を開き、雑談に夢中になっている学生もいますが、勿論、一生懸命に勉強している人もたくさんいます。テストが終ると、いつも、決まった学生が利用し、平常の静けさにもどります。

図書館を利用したことのない学生は、新聞、雑誌、等の閲覧だけでもよいので、利用してほしいと思います。

私自身、読書に親しみが薄かったので、毎日、図書館を利用している学生をみて、ただ、ただ、感心するばかりです。図書館への出入りの際には、出来るだけ声をかけて、笑顔で応対したいと心掛けています。これからも、規則を守って、大いに図書館を利用して、ほしいものです。

新着図書30選

〈人文・社会〉

◆大津和子著

「一本のバナナから」（国土社）

ある高校の先生が、私たちが食べている一本のバナナがフィリピンの人達の大変な労働によっていることを、資料を通してまとめたものです。飽食の私たちには考えさせられる問題です。　（大林記）

◆長与善郎他著

「十四人の信長」（講談社）

今ＮＨＫのテレビドラマに登場している織田信長について、長与善郎他十四人の著名な作家たちが、自らのとらえた信長像を、小説、史伝史論、戯曲に描いてみたものである。歴史小説に興味のある方々は面白く読めるものです。　（大林記）

◆ＮＨＫデータ情報部編（雄山閣出版）

「ヴィジュアル百科　江戸事情　第一巻　生活編」

昨年の11月から始まったこのシリーズの第一巻は生活編で、項目毎に多数の挿図を入れて江戸時代の主に庶民生活を紹介してあり、大変興味深い。以後、続刊として産業編、政治・社会編、文化編、建築編、服飾編が企画されており、特に建築編についてはどんな内容のものか、今から楽しみにしている。　（岡本記）

〈自　然〉

◆戸田盛和、浅野功義著

「行列と１次変換」（岩波書店）

行列は工学においても、いろいろ使用されている。本書はその行列の基本的な事項を分かりやすく説明している。定義・定理・証明のスタイルを避けて、初心者にとって親しみやすく、概念を把握しやすくするように配慮されている。

必要な章だけを気軽に読んでみてもよいと思う。

（今井記）

◆Ｂ．ボイヤー著　加賀美鐵雄、浦野由有訳

「数学の歴史　１～５」（朝倉書店）

Ｂ．ボイヤーの著書（1965）の訳書である。序文で著者は本書の目的を次の様に述べている。「数学の歴史を数学的構造と数学的正確さのみについてでなく、歴史的な見通しと歴史的な細部にも手を広げて忠実に紹介することである。」難かしい内容はとばしても、人間のちえのすばらしさがわかると思う。

（有廣記）

◆Ｎ．スピルバーグ，Ｂ．Ｄ．アンダーソン著

「物理学の七つの革命」（森北出版）

二千数百年に及ぶ物理学の歴史には七つの革命があったという。コペルニクス天文学、ニュートン力学、エネルギー、エントロピー、相対性理論、量子論、素粒子とクォークがそれらである。物理学の本質をえぐった異色の書で、一般向けとはいえレベルは高い。

（笠松記）

◆ＮＨＫアインシュタイン・プロジェクト編

「アインシュタインロマン　１～６」

（日本放送出版協会）

常識を疑い、常識にとらわれない発想からいかにして相対性理論が生まれたかをわかりやすく描いてある。又、光の実体の探求から量子力学成立の発端を作り、光を巡る量子力学と対決し続ける。この現代物理学の成果をたとえ話や解釈によってやさしく説明されている。　（小山記）

◆戸田盛和著

「カオス－混沌のなかの法則」（岩波書店）

天気予報はどうしてあたらないのか。木の葉が落ちる道筋や渦の動きは、なぜ正確に予測できないのか。不規則で予測不能にみえる現象の背後に法則性のひそんでいることが、カオスの研究でわかってきた。相対論、量子論とならんで20世紀科学の大発見といわれるこのカオスを、やさしい言葉で語る。　（深澤記）

▼新着図書棚▲

整理の終った図書はしばらく新着図書棚（カウンター前）に展示した後、開架書架に並べます。

〈機　械〉

◆水野　滋、赤尾洋二編

「品質機能展開」（日科技連）

企業における、全社的品質管理（ＴＱＣ）へのアプローチとして、昨今とみに注目を集めている品質機能展開活動を、各社の実施例をまじえつつ、具体的に解説した世界で初めての啓蒙書である。

（註）品質機能展開とは、品質そのものを展開する品質展開と、その品質を確保する品質管理機能の展開とが結合した新しい品質システムである。

（池上記）

◆宮崎俊行〔ほか〕共著

「レーザ加工技術」（産業技術）

レーザは、加工、計測、通信等の幅広い分野で用いられている。本書では、レーザ加工の基礎としてレーザ加工の原理、特徴などを解説した後、穴加工、切断、接合、表面除去などの方法、装置および応用について、最新のデータを用いてわかりやすく解説している。

（河野記）

◆古谷　誠、福井康裕著

「メディカルエンジニアリング」（朝倉書店）

メディカルエンジニアリングは医学、歯学、工学にわたる複合領域の一分野で、近年著しい発展を続けている。本書は、メディカルエンジニアリングの現状を初心者にも分かり安く解説したものであり、これからこの分野を学習しようとする初心者に勧める。

（森川記）

〈電　気〉

◆オーム社編

「１種情報処理問題集'92年版」（オーム社）

第２種だけではもの足らず第１種情報処理技術者試験を試みる方に、過去３年間にわたる問題をテーマ別に分け、類似問題にも対処できるように必須事項を述べてあり、過去５年間の問題一覧と傾向と対策また受験に必要な呼び知識に付いてまとめてある。

（横瀬記）

◆味村重臣著

「ＣＯＢＯＬプログラムの作成」（オーム社）

第２種情報処理技術者試験でＣＯＢＯＬを選択する為に、初めてＣＯＢＯＬを勉強する人の為に基本的なプログラムの作成技術、フログラミングの基本テクニック、応用プログラミングテクニックに付いて書かれており、何をどう考えて良いのか書かれている。

（横瀬記）

◆鈴木　昇著

「情報処理検定２級標準テキスト」（オーム社）

商業系の高等学校に在籍する生徒の情報処理技術の定着と向上を目的として、情報処理検定が行われているが、今では一般人や大学生も受験しています。将来必要かも知れない方で２・３級なら受けてみようという方への検定用に理解し易く書かれたテキストです。

（横瀬記）

〈土　木〉

◆長谷川　博〔ほか〕著

「土木工学概論」（コロナ社）

土木とは何か、土木工学が自然・社会とどうかかわっているのか、土木工学の全体像を写真・図表等を多く使って系統的に、平易にまとめられている。どのような目標を持ち、将来どのような仕事に従事する技術者になるべきか、夢を与えてくれそうな本である。

（石井記）

◆地球環境工学ハンドブック編集委員会編

「地球環境工学ハンドブック」（オーム社）

どんな事が地球環境問題なのか、その原因は何か、その保全技術の現状と展望はどうなのか、といった疑問を見やすさ・引きやすさを配慮した辞書的性格をもたせて回答してある。

また、問題解決のアプローチの一つ大規模工事計画の記載は、土木工学を専攻する学生にとっては興味深いところである。

（大橋記）

◆フェアレー、モステラー共編　村上征勝、馬場康雄、中島詞子訳

「政策の統計学」（翔人社）

ハーバード大学の統計的手法の論議資料の中から、社会的な時事や公共政策の意思決定などに統計を応用した実例を集めたもの。高校の代数と回帰分析の知識があれば読みこなすことができる。以下いくつかの事例タイトルを列挙しておくので、1つでも関心があれば一読願いたい。卒業研究の膨大なデータをまえにして戸惑っているあなた、統計分析が上手に利用できるようになるかも。

・ルート2における交通事故の分析
・大学院入学判定における性差別
・車検制度と交通事故死亡率
・大気汚染は寿命を縮めるか？
・ハリケーンを制御するか否かに関する意思決定
・大学院入試のケーススタディ
・コリンズ事件　（藤原記）

◆土木学会編

「土木へのいざない」（土木学会中国四国支部）

土木学会中国四国支部の創立50周年の記念誌である。

主な内容は、各県別に土木構造物が写真入りで紹介されており、中四国の土木技術の近代史が理解できるとともに、土木構造物の種類の勉強にもなる。

（竹村記）

〈建　築〉

◆ピーター・マレー著

「イタリア・ルネッサンスの建築」（鹿島出版会）

二年位前から、黒い表紙のＳＤ選書の兄貴分とも言えるＳＤライブラリーが出るようになって、既に10冊近くが出版されている。これはそのうちの１冊で、ブルネレスキから始まってパラーディオにいたるイタリア・ルネッサンス期の建築家とその作品を紹介している。西欧の様式建築におけるイタリアの果たす役割は大きいものがあり、またルネッサンス建築を理解する上においても役に立つものと思う。　（岡本記）

◆写真：さとうつねお　文：鈴木喜一／佐奈芳男

「明治の西洋館　Ⅰ・Ⅱ」（毎日新聞社）

同名の本が10年以上前に出版されているが（河東義之著「明治の西洋館」新人物往来社　1979）、これは二分冊の写真集で、約140棟の明治の西洋館が用途別（Ⅰ－邸宅、病院、銀行、会社、協会、Ⅱ－学校、郡役所、警察署、官公庁、鉄道）にまとめて紹介されている。呉の関係では、入船山記念館内の旧呉鎮守府長官官舎が掲載されてあるのみで、全体的に旧軍施設が省かれているのは非常に残念である。　（岡本記）

◆二川幸夫：企画・編集

「安藤忠雄ディテール集」

（Ａ．Ｄ．Ａ．エディタ・トーキョー）

本書は建築家「安藤忠雄」の実施図面として描かれた多くのパースやアイソメを通して、建築の本質とは何かを我々に語りかけている。ディテール図面は単なる施行詳細図としてだけでなく、設計を検討・決定する上で極めて重要な図面であることを教えてくれる。

（篠部記）

◆ロジャー・Ｈ・クラーク、マイケル・ポーズ著

「建築フォルムコレクション」（集文社）

本書は世界の代表的な現代建築の64作品を例に上げながら、平面図・断面図・立面図などを通して、建築の造形思考をタイポロジカルな分析手法により解説したものである。建築設計における造形上の手がかりやアプローチを我々に与えてくれる。　（篠部記）

〈共　通〉

◆大原育夫著

「人工知能入門」（東京理科大学出版会）

人工知能を入門的に理解することを目的として書かれている。この中では、知能の重要な側面として述語論理を基本的な表現手段として、問題の表現、探索、推論、知識表現等、基礎的な手法を取り上げている。予備知識はとくに必要とせず、わかりやすく説明されている。　（岩本記）

――利用について（お願い）――

▶〈転貸禁止〉◀

最近、「貸出図書」や「利用票」の転貸による事故・トラブルが発生しています。

決して他人に貸与しないで下さい。貸与により事故が生じた場合は、利用票を交付されている者の責任となります。充分に留意して下さい。

留学生手記

インドネシア人の日本についてのイメージ

土木工学科３年
ペトルス　ラハユ

日本人に「インドネシアについて知っていますか」と尋ねたら、「知りません」と答える人が多いでしょう。一方、私たちのインドネシア人に同じことを尋ねたら「はい、知っています」と答える人が多いです。それは当り前のことです。世界の国々を見ると日本は大国の一つです。もちろん、それは国の面積についてではありません。インドネシア人は、日本について知っているだけではなくイメージも持っています。そう言うわけで、私はそのことについて書いてみようと思います。イメージなので、もちろんいいイメージだけではなくて悪いイメージもあります。だから日本の人は気を悪くしないでください。

実は、インドネシア人は日本のことよりアメリカとヨーロッパの国々のことの方をよく知っています。私たちは歴史的に1904年まで日本のことは全然知らなかったのです。1904年から1905年まで日本はロシアと日露戦争をやって勝ちました。だから、私たちは日本のことを知るようになりました。その時インドネシアはオランダに支配されていました。日本の勝利を聞いた私たちアジアの国の人たちは、ヨーロッパの国と戦争しても負けないだろう、私たちは独立できるだろうと思いました。日露戦争の前も私たちはヨーロッパの国、特にオランダに負けない気持ちがありましたが、あまり強くなかったのです。私たちの独立の確信は日本の日露戦争の勝利を聞いてから強くなってきました。その時、インドネシア人のイメージはどんなイメージであったかは言葉では難しいです。しかし、それは絶対いいイメージでした。今も私は日本はロシアを負かしたのはよかったと思います。

しかし、残念ながらそのいいイメージは太平洋戦争の時なくなりました。日本はインドネシアに支配しにきました。その時日本は約３年半しかインドネシアを支配しなかったのですが、私たちの祖父と祖母にとっては日本の支配はきびしすぎました。彼たちは本当に貧困にあえぎました。今も生きている彼たちはまだ恨みを持っています。日本に関係があるものは何でも嫌いです。私たちインドネシアの若者は彼たちの気持ちがわかっています。しかし、私たちのイメージは彼たちのイメージと同じではありません。日本が昔は悪かったのはわかっていますが、それは昔のことで、50年もたっているじゃないですか。今、日本はもう変わっていると思います。それは、日本の資金の援助を受けるためではなくて国際関係のためです。

日本の資源、例えば鉱物資源はそんなに多くないですが、日本の経済が進んでおり、日本人の努力はすごいと思います。そういうイメージでインドネシアの若者は日本にどんどん来ます。働くためではなくて勉強のためです。私たちインドネシアからきた留学生は、日本の学校を卒業してから帰国し、他のインドネシアと一緒に自分の国を建設します。

インドネシアでは10年前から日本のテレビ映画がよく放送されています。けれども、放送される映画はいつも日本の昔の文化についての映画です。だから私たちは、日本人は自分の昔の文化をよく守ってるというイメージを今も持っています。しかし、私たちはそのイメージが正しいかどうかわかりません。日本の若者を見るとインドネシアの若者と同じで、アメリカの文化をよくまねしています。そういうことを見るともちろんそのイメージは正しくないでしょう。けれども、いろいろな祭りとかＮＨＫの番組を見ているとそのイメージは正しいと思います。

インドネシアの若者の日本についてのイメージはほとんどいいイメージですが、悪いイメージも持っています。インドネシア人、特にインドネシアの若者にとっては日本は国際関係的にあまり良くないと思います。日本の意見はアメリカの意見とほとんど同じです。その他、日本人は外国人、特に白人と会う時いつも恐がっているみたいです。どうしてそんなことがあるのですか？そういう質問は私たちの頭によく浮かんできま

す。インドネシア人だけではなくて他の国の人々も同じことを感じていると思います。

日本人は働きすぎるとよく外国から言われています。私たちもそう思っています。けれども、実際日本人は働きすぎですか？　一生懸命に働いていますか？もちろん働きすぎることや一生懸命に働くことの境界は見えないですが、日本人の働き方を見ると誰でも上の質問が答えられるのでしょう。しかし、最近の情報によると、働きすぎる日本人はまだ多いですが、そうではない人もだんだん多くなってきているようです。

今、日本の経済は発展し経済的に大変強い国になっています。太平洋戦争の前には日本の軍事力は大変強くなりました。そういう昔のことを思い出して私たは心配しています。私たちは日本が太平洋戦争の時のようになるのを恐れています。私たちはまた支配されるのはいやです。それは当り前のことでしょう。日本の軍事力を見ると今ごろ日本が太平洋戦争の時のようになるはずはないでしょうが、経済力があるから日本にとって軍事力を増大するのはそんなに難しくないでしょう。だから他の国、特にアジアの国々を心配させないように日本は軍事力を増大しない方がいいと思います。

以上は多くのインドネシア人の日本に対するイメージです。しかし日本には貧乏人がいないとか、日本人は宗教のことをあまり考えないなどのイメージを持っている人もいますがそれは少ないです。

海外だより

ケベック

土木工学科教官
藤原　章正

国際会議（第6回 International Conference on Travel Behavior）に出席する目的で、5月20日から30日までカナダのケベックシティに行ってきました。今回の渡航の様子を簡単に報告します。

●ケベックシティ

カナダ10州の中で最大の面積を誇るケベック州の州都、岩盤の上に広がる都市で、セントローレンス川から見上げると、街全体が要塞のように見える。8割以上の住民がフランス系カナダ人ということで、公用語はもちろんフランス語、会話や道路標識など、街中にフランス語が飛び交う。英語に輪をかけてフランス語に疎い私にとっては、会議よりも食事や買物の時の会話の方が大仕事だった。

セントローレンス川よりケベック旧市街を望む

英仏戦争の際、フランス軍最後の砦となった街という先入観があるせいか、旧市街を取り巻く城壁や砲台がひときわ目を引いた。住民の人々はフランス文化に誇りを持っていて、英語主体の現政府から独立しようとする運動が再燃していると聞いた。外資系の会社が立ち退いた後の空き家が、街の中心ではいくつか目に止まった。

旧市街の道路網はお世辞にも整備されているとは言えない。高速道路を除くと、曲がりくねった石畳の細街路が多い。域内の公共交通機関は路線バスのみで、自動車への依存度が高い。通勤に自動車を利用する人の割合が全体の7割を占めるため（参考までに、呉地区では28%、広地区が32%、焼山地区でも52%）、人

口の割に道路混雑がひどかった。歴史の重みを我々に伝えるフランス風の建物と石畳をあくまで保存しようとする市政に感心した。

会議のプログラムの中に、セントローレンス川下りと河畔での晩餐会が組み込まれていた。最も印象に残った観光スポットは、モンモランシーの滝だった。あのナイアガラの滝の1.5倍の高さを誇るという。渡航の時には、風景画を一枚記念に買うことにしているが、今回はモンモランシーの写真を選ぶことにした。

モンモランシーの滝

●国際会議

国際会議は、テーマごとに6つのセッションが並行してセミナー形式で行われた。幸か不幸か日本からの出席者は4名しかいなかったため、会期中日本語を喋る機会はほとんどなかった。交通工学の専門家の他に

国際会議の行われたホテル

経済学、心理学、地理学などの分野の研究者も多く、工学の境界を越えた範囲の議論にはとてもついてゆけなかった。発表の最中でも疑問点があれば、ファーストネームで意見を言い合う雰囲気の中で、私はただ40分間の発表が早く終わるよう心の中で手を合わせるしかなかった。結局、会議の中で私が喋ったのは自己紹介と発表の時だけだった。英語がうまくなりたい！

建築物の知識に乏しい私には、フランス風建物の解説はとても無理ですので、このような拙稿になってしまいました。今回おさめてきた写真や資料は、土木工学科の学生諸君には授業を通じて紹介することができましたが、他の学科の学生諸君で希望者があれば、教官室にありますのでいつでもご覧ください。

お　知　ら　せ

◆時間外閲覧（夜間開館）利用状況

（　）内は1日平均

	開館	利用者数	貸出冊数
91年10月	24日	497人(20.7)	151冊（ 6.3）
11月	20日	524人(26.2)	185冊（ 9.3）
12月	18日	944人(52.4)	183冊（10.2）
92年1月	20日	756人(37.8)	277冊（13.9）

◆「読売新聞」備付開始しました。（1月より）

他の「朝日」「毎日」「中国」「日経」「日刊工業」「日本工業」「Asahi Evening News」「科学」各紙も利用下さい。

編集後記

わずか24ページの図書だよりですが、約40名もの方々の協力を得て刷り上りました。原稿を書くことを「仕事」と言い聞かせ、悲壮な決意で寄稿して下さった方もあり、協力に感謝しております。

表紙の写真を投稿文と対応させる、夜間図書館の空気を知っていただく、より多くの方々から原稿を集める、などの方針で編集しました26号、いかがでしょうか。　（図書委員　石井義明）